

主語判定の手がかり

○基本

- ① リード文をよく読み、登場人物・その人間関係・場面を確認する。
- ② 接続助詞までをひとまとまりとして読み、その範囲で主語・述語の対応を確認する。

* 「て」は単純接続なので、ほとんどの場合前後で主語は変わらない。それ以外は変わる可能性がある

* 敬語があるときは、その種類が主語判定の大きなヒントとなる。

例 22 『源氏物語』（若紫）冒頭部

() () 尊 接助

月のをかしき夜、忍びたる所に、からうじて思ひたち給へるを、時雨めいてうちそそぐ。

この文では述語「思ひたち給へる」の主語()が省略されている。

光源氏が尼上を訪ねる場面であること(リード文)、「給ふ」が尊敬語であることから、主語は源氏であると判断できる。

○会話文がある場合

- 1 会話の箇所まで、基本の①・②のやり方で主語を判断。
- 2 会話の箇所に来たら、会話の内容はとりあえず横に置き、誰と誰のやりとりかを先に判断。
* 最初の会話は、多くの場合主語が明示されている。誰が登場するどんな場面か、敬語表現はどうなっているかを考慮して、主語を決めていく。
- 3 2の作業で流れをつかんだ上で、会話の内容を読み取る。

例 22 『源氏物語』（若紫）3行目() () は省略された主語

例の御供に離れぬ惟光なむ 「 」と聞こゆれば、 「とのたまへば、
わざとかう立ち寄り給へる事と言はせられたれば、入りて 「 」と言ふに、おどろきて、
「 」と言へども、 帰し奉らむはかしこしと (思ひ) て、南の廂ひきつくろひて入れ
奉る。

a は尊敬語なので、源氏。 b は源氏の言葉を受けての行動で、敬語もないことから惟光。

c と d は「て」で結ばれているので同一主語。惟光に「言わせ」られたので奥に入って「言った」人⇨取り次ぎの侍女

e と f は「て」で結ばれているので同一主語。取り次ぎの侍女の連絡を受けて驚いた奥にいた侍女。

g・h・i はやはり「て」で結ばれているので同一主語。逆接の接続助詞「ども」の前後の文脈をみると、源氏の来訪におどろいたが、「帰し奉らむはかしこし」(お帰し申し上げるのは恐れ多い)と思ったので、結局「入れ奉る」人⇨奥にいた侍女
ちなみに、c～fまで尊敬語が用いられていないことも大きなヒントとなる。「若紫」の授業で尼上に尊敬語が使われていたという知識も重要なヒントです。